

ZENCOLO

ゼンコロ

2020.1

No.167



- 羅針盤
- 北から南から
- 第82回ゼンコロ総会、開催
- なかまの声
- シリーズ「社会福祉法人は今、社会から何を求められているか？」
- お薦めの本
- 自慢の作品—シリーズ
- トピックス
- 編集後記

一般社団法人 ゼンコロ
〒165-0023 東京都
中野区江原町 2-6-7
電話 03-3952-6166
発行 中村敏彦



羅針盤

共生社会への挑戦

会長 中村 敏彦

はじめに

明けましておめでとうございます。

いよいよ、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。パラリンピックの歴史を紐解くと、障害者施策の発展に大きく影響していたことが分かります。共生社会を実現させるためにも、障害分野における過去の歴史や現実問題を認識したうえで、本スポーツ大会を迎えられることに期待したいと思っています。

障害者スポーツ競技大会の起源は、1948年7月28日、ロンドンオリンピック開会式と同日に、戦争で負傷した兵士たちのリハビリテーションとして始められ、イギリスのストーク・マデビル病院で実施した競技大会とされています。1964年には、東京で夏季オリンピックと同時に開催されました。東京大会後は、オリンピック開催都市と同一都市での実施は定着せず、いったん中断することとなりますが、1972年のハイデルベルク大会で復活しました。

さて、1964年、東京大会が開催された際、一人の青年が通訳ボラン

ティアで参加しました。彼は通訳という役割を務めながら、海外と日本の障害者の置かれている状況の違いに胸を痛めます。海外からの参加者たちは、口々に恋愛の話や仕事の話など社会生活で経験する様々な出来事が話題です。一方国内からの参加者は、大会が終わると病院や施設に戻る人が多く、社会生活を謳歌している人など少数だったのです。何とかしたいという思いは、1981年国際障害者年を契機として益々活発になります。国際企画を国内に紹介し、それまでバラバラに活動していた各障害者団体等と呼び掛け、大同団結を実現しました。

この競技大会を成功させるために多くの人が関ってご尽力されており、障害分野に様々な影響を与えています。パラリンピックは、スポーツを通じて障害者の可能性を全世界の人が確認する場でもあるのです。

国の制度改革はいったいどのような内容で、どのように進めようとしているのでしょうか。本稿では、共生社会実現のための全世代型社会保障改革に、ぜひとも反映させなければならぬ課題として、障害分野の現実問題に触れてみたいと思います。

改革のはじまり

2001年、当時の小泉内閣時代に

設置された「経済財政諮問会議」によ

り「聖域なき構造改革」で「骨太方針」が打ち出されました。一方、福祉ニーズは多様化・複雑化し、複合的な課題を有することや横断的な対応を可能とする相談・支援の重要性が問われ、少子化・超高齢化の中では人口減少が進出し、地域の実情に応じた体制整備や人材確保が課題となつていることを背景に、「新たな時代に対応した福祉の提供・ビジョン」が公表され、「我が事・丸ごと」を本丸とした「地域共生社会の実現」が打ち出されました。

本改革の具体化は、社会保障制度改革推進法に基づくもので、審議するための組織として、社会保障制度改革国民会議を内閣に設置し、団塊の世代がすべて75歳以上になる2025年に向けて、いわゆる社会保障と税の一体改革への転換を打ち出したことに始まります。

消費税の負担を求める代わりに、子育て世帯など現役世代まで支援を広げて、全世代を支える社会保障にすること、そして、高齢者にも、経済力に応じた負担を求め、支え手に回ってもらうというものでした。2014年に消費税率を8%に引き上げるという第一弾の改革が実施され、昨年の10%への引き上げで、予定されていた一連の改革を実施する下地を作ったと受け取

れます。

目指す方向性

「我が事・丸ごと地域共生社会の実現に向けて」は2017年に発信され、一億総活躍社会づくりを目指すことされました。その中では、現状を「一億総活躍社会づくりが進められる中、福祉分野においても、『支え手側』と『受け手側』に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、公的な福祉サービスと協働して助け合いながら暮らすことのできる『地域共生社会』を実現する必要がある。」と総括し、「新たな時代に対応した福祉の提供・ビジョン(2015年9月17日)」では、包括的な相談支援システムの構築、高齢・障害・児童への総合的な支援の提供といった新しい地域包括支援体制の確立を目指す。そして、『ニッポン一億総活躍プラン』(2016年6月2日閣議決定)では、子供・高齢者・障害者等全ての人々が地域、暮らし、生きがいと共に創り、高め合うことができる『地域共生社会』の実現を目指す」と公表しています。

我が事・丸ごと地域共生社会の実現、一億総活躍社会の実現、全世代型社会保障、いずれも、とても魅力的な言葉

です。あえて前向きに捉えて、次に起こっている現実問題をしっかりと受け止めてほしいものです。

障害分野の数々の問題

1. 財政制度等審議会の議論

財政制度分科会における論点は、社会保障関係費の伸びは、高齢化に伴う伸びとその他要因に伴う伸びに分かれ、高齢化に伴う伸びは、社会保障関係費に特有のものでやむを得ない増だが、その他要因に伴う伸びは、他分野と同様、制度や効率化に取り組み抑制していかなければならない、としています。抑制の具体化はどのような形で表れるのでしょうか。

2. 生活保護制度の後退

2013年以降に生活保護費の段階的な引き下げが実施されており、生活保護費は平均6.5%、最大10% (総額670億円) の減額となっており、2018年の見直しでは、そこからさらに平均1.8%、最大5% (総額160億円) の引き下げを決定し、段階的に実施されています。本件については、国連人権高等弁護官事務所から特別報告者ら4人の連名で「貧困層の最低限の社会保障を脅かす」と警告する報道発表が公開されました。

3. 障害年金打ち切り問題

2018年5月、日本年金機構が

障害基礎年金の受給者約千人余りに対し、障害の程度が軽いと判断して支給打ち切りを検討していたことが判明しました。認定時の地域格差を是正するため、都道府県単位だった審査手続きを、2017年に東京の障害年金センターに一元化された影響が大きいと報道されましたが、わずか1カ月足らずで打ち切りを撤回しています。障害年金は生死にかかわる重大問題であり、あまりにも軽率な対応でありました。

4. 介護保険への移行問題

岡山では、一人の男性が65歳になる3日前、「介護保険を申請していない」という理由で毎日平均7時間半の介護をすべて打ち切る処分を強いられました。それに対して、障害者総合支援法に基づく無償の訪問介護が打ち切られ、介護保険の利用で自己負担が生じたのは不当だとして提訴し、岡山地裁は、原告側の主張をほぼ認め、市に決定の取り消しと慰謝料など107万5千円の支払いを命じる判決となりました。いわゆる65歳問題は各地でも発生しています。65歳を境に障害がなくなるわけではありません。障害に伴う支援と高齢による介護は内容と質が異なることを理解し、併用を可能とした施策が望まれます。

5. A型事業所での解雇

2017年7月、ある福祉事業所が

突然閉鎖し、働いていた154人の障害者を解雇しました。運営は株式会社で事業所は全国6カ所にありました。A型事業所の数は、制度が創設された2006年の翌年では全国で148カ所、わずか10年で3,455カ所、23倍に急増しています。営利目的の株式会社などの参入が主な要因で、A型事業所の設立を後押しするコンサルタント会社まで設立されたのです。各地でA型事業所の閉鎖が相次ぎ、100人を超える大量解雇が全国で4件、職を失った障害者は700人にも上りました。

6. 国会に新風

昨年7月の参議院議員選挙で、少数野党から出馬した筋萎縮性側索硬化症(ALS)患者の船後靖彦氏と、脳性まひを患う木村英子氏の2名が当選しました。二人が出馬した党は、伝統的に日本社会で見過されてきた人々を重視し、「誰も切り捨てられない社会」を作りたいと訴えました。本格的な議員活動では、国会の場の環境改善の見える化にも貢献し、発言の一言一言に障害分野ならではの課題が含まれています。そのことに対する国民の反響は様々ですが、間違いなくインパクトを与えているといえます。国会では、両氏の活動に対して党派を超えた協力態勢が構築されつつあると評価されているようです。首相の所信表明演説では、

「障害や難病のある方々が、いきいきと活躍できる時代を創り上げるため、国政の場とともに力を合わせていきたい」と述べています。

まとめに

深刻な問題は他にも多く存在しますが、施策上の課題を中心にまとめてみました。少子・超高齢化社会を背景にした社会保障改革の中では、地域共生社会、つくりが重要であることは間違いありません。そのためには、誰もが排除されない社会、障害者も含めた国民すべてが参加できる社会環境が必要です。教育も重要な役割を果たさなくてはなりません。人が「生」を受け「命」を全うするまでの間、一人一人が豊かで安心して暮らせる社会、それぞれが人として尊重され生きがいをもって活躍できる環境づくりこそが、全世代型社会保障の実現であり、共生社会といえるのではないでしょうか。





空き缶は先ずアルミ缶とスチール缶に選別し、プラタブを外してから、洗浄して潰す工程をそれぞれ利用者の皆様に作業して貰っています。それをその後近くのリサイクル資源業者さん

指定障害者支援施設青森コロニーリハビリでは、様々な理由により一般的な軽作業をすることが困難な利用者様への、日々の日中活動として有効な作業として、職員や通所の利用者様の各家庭からの持ち込みによる物や、元々施設内に設置している自動販売機より、購入後に出る空き缶・ペットボトル等を回収し、リサイクルしています。作業工程としてはペットボトルは先ずキャップを外し、ラベルを剥がして洗浄し、最後に潰す工程の作業をします。

青森

リサイクル事業の拡大

青森県コロニー協会
リハビリ 支援課 課長
野坂 雅博



に持ち込み買い取って頂いていきます。

その買い取り分の料金を、少しでも利用者の皆様への工賃に反映できればという思いで作業を続けて来まし

たが、この度ご縁が有ってリサイクル事業に空き缶等の提供を申し出てくれた、近場のコンビニエンス店舗が現れ、今年の9月12日(木)より毎日決まった時間に空き缶、ペットボトル等を利用者さんとも回収に伺い、その後リハビリに持ち帰ってから通常のリサイクル作業工程をしております。



今後とももっと多くの方々にリサイクル事業のご理解をいただき、空き缶、ペットボトルの提供をしていただけるお店を増やしながら、リサイクル事業の拡大を目指していきたいと思っております。

山形

山形県コロニー協会研修会を開催しました。

山形県コロニー協会
ういる天童
菊地 幸恵

今年も児童支援課の研修会を11月9日(土)に開催いたしました。昨年度のアンケート要望に答え、「未来につながる大切な力」今、出来る事を考える」をテーマに一日通しての研修会を行いました。

基調講演を、福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センター医学部小児学講座教授の横山浩之先生にお話いただき、「早寝・早起き・朝ご飯」の大切さや、お手伝い、メディアとの関わり方、将来の就労につなげていくために必要なことは何かをわかりやすく事例などを含めてお話いただきました。また将来の就労に向けた自立支援の考え方として、手を掛けすぎでは自立を損ねてしまうことや、子どもたちの成長に合わせる支援を減らしていく視点の大切さなどについて学びました。続けて、当法人児童支援課の3事業所が実践報告を行い、日々の実践を写真等を使いわかりやすくお伝えする事で、地域により広く知っていただき、また私達コロニー協会全体が就労に向けて

いくことの大切さを確認しました。その後のグループワークでは参加者全員で、研修テーマについて意見交換を行いお互いの気付きをより深める機会となりました。最後のQ&Aの時間では、沢山の疑問や質問に2人の専門医から具体的なアドバイスを頂きました。

今回の研修では、将来を見据えたとき「土台」が重要であり、その土



「できる、できている、違いがわかりますか？」を講演いただきました。将来を見据えることは先回りではなく将来像を捉えた関わりが大切である事、また生活力を高めて



どのような支援を行っているか知っていただける機会となりました。

午後からは、いしい醫院院長石井玲子先生による特別講演

長 野

多機能ミシン機導入

ながのコーニー
長野福祉工場 印刷部製造課
主任 山岸 知紀

印刷部製造課では、オフセット輪転機、オンデマンド印刷機、オフセット印刷機を使って印刷し、折り機、中綴じ機等を使って製本・仕上げをやっていきます。製造課の職員は10名です。

日本郵便の年賀寄付金配分事業により、令和1年9月2日にホリゾン社製の「多機能ミシン機 PerforatorVP-66A」を導入しました。

今まで使用していたミシン機では、紙のサイズ、ミシンの位置など全てハンドルやボルトにて手作業で調整、固定をする必要があり、微調整では苦労することがありました。



タッチパネル



作業中



全体像

今導入した多機能ミシン機では、調整はタッチパネルでのデータ入力により自動で行うことができ、利用者さんへの機械の操作指導を行っています。



「グループホーム見学会」を中学3年生から高校3年生、ご家族様を対象に開催しています。今年は特例子会社「プリチストン

トーコロあおば就労サポートセンター「アリーバ」は中学生と高校生を対象とし、就学時から始める働くことを目指した早期職業準備トレーニングを特徴として平成27年11月に開所し、4年が経ちました。子ども達の笑顔と元気な声が響き渡る毎日を過ごす中、アリーバでは日々の作業トレーニングの他に様々な取り組みを行っています。夏休み期間中には、卒業後を見据えて「企業見学会」及び「グループホーム

東 京

今年度のアリーバの活動について

東京コーニートーコロあおば
就労サポートセンター アリーバ
児童発達支援管理責任者
横山 美紀

作業の幅が広がって、今後のミシン新規案件に期待が膨らみます。

チャレンジド株式会社」と6月に開設した「青葉町グループホーム」の見学会を開催しました。皆様の関心も高く、多くの利用者さんとご家族が参加されました。

その他の取り組みとして、皆様の心に残る夏休みの企画として「余暇プログラム」で恒例になった「かき氷作り大会」に加え、今年は「ビンゴ大会」も同時開催しました。ビンゴ大会の景品は「おやつのおまけ合わせ」を用意し、読み上げられる数字に一喜一憂しつつ、数字が揃うと「ビンゴ!」と嬉しそうな大きな声が響き渡りました。お気に入りの商品を手にした子ども達の笑顔は格別でした。その後のかき氷大会では、メロンやイチゴや抹茶、あんこなど自分で作ったかき氷をおいしそうに召し上がられていました。

また今年初めての試みとして「革製品を作ろう」を行いました。東大和市の第2あとりえトントンさんを講師にお迎えし、キーホルダー作りを行いました。皆

さん初めての体験にやや不安そうな



表情でしたが、刻印を打つ練習を続けていくうちに楽しそうな表情と集中した真剣な眼差しへと変化してきました。出来上がった作品を手にながら「またやりたい」「もっとやりたかった」「楽しかった」と様々な感想を聞くことができました。

昨年度は報酬改定により、放課後等デイサービス事業は前年度比で2割ほど落ち込み、事業的に苦しい状況に陥りました。しかしご紹介しましたプログラムや日々の作業トレーニングに工夫することで、利用率を上げ半期が終わった段階で1割ほど戻すことができました。今年度末には高校3年生を8名送り出すため、来年度以降はまだ不安要素が多いですが、卒業後の進路に役立つ企画や日々の支援と、今しか味わえないような楽しさを提供できるよう、職員一同歩み続けていきたいと思っています。

あかつき

日帰り旅行に行ってきました!

セルプあかつき 齋藤しのぶ

令和元年10月4日(金)に、就労継続支援B型スペース・まどかと合

同で「群馬サファリパーク」と「上里カンターレ(ランチバイキング)」に行ってきました。今年は雨や台風も多く当日の天気も気になっていましたが、バスに乗るころには徐々に天候も回復し、爽やかな天気のなか出発することが出来ました。セルプあかつきは就労移行支援事業所です。日帰り旅行に向けて、事前にみんな

で「楽しい旅行にするためには?」を話し合い、「時間を守る事!」や「自分勝手な行動はしない!」「マナー違反をしない!」等の意見が出た中で、みんなでルールを決めました。また旅行先も4つの中から行きたいところを投票するという、旅行前から楽しい企画だったと思います。いつもの始業時間よりも30分早い集合時間になりましたが、各自前日までに電車やバスの時間を調べ、遅刻する方は誰もいらずしゃいませんでした。バスの中ではカラオケを歌う方もいて皆楽しそうでした。群馬サファリパークではキリンやシマウマ、アフリカ牛が迎え出迎えます。バスの中から動物の迫力を見ることが出来ます。「こんなに大きいんですね!」とか「近くで見ると目が可愛いですね。」等様々な感想が出たり、写真を撮ったりと楽しそうでした。



ウォーキンググゾーンではトラがお昼寝中でした。お腹を出して寝ていたり、お母さんトラにぴったりとくっつい



て寝ていたりする子供のトラを見て、「可愛い!」を連呼されていました。ライオンやホワイトタイガー等珍しい動物も見ることが出来て満足されたようでした。次はいよいよ楽しみにしていたランチタイムです。上里カンターレではイタリアンバイキングで、焼きたてのピザやパスタ、新鮮なサラダ等イタリアの家庭料理が味わえます。デザートも一口大に切ったケーキやアイスと豊富にあり、何回もおかわりされていましたが、みんな決めたルールの中に「お皿に

盛ったものは残さない。」というのがあり、みんな残さず綺麗に食べるものが出来ていました。満腹になった方はお土産の買い物タイムです。バームクーヘンやスイーツ、美味しいパン等たくさんお土産があります。ご家族へのお土産、グループホームの方へのお土産を「これで喜んでくれるかな？」と職員へ聞いてくる方や、お金の計算をしながら選んでいる方と、それぞれ考えて買っていました。帰りはお腹も心も満たされ静かなバスでした。みんなで決めたルールも守れ、ケガもなく楽しい日帰り旅行でした。次回も楽しみですね！

山口 利用者向け勉強会

山口県コロニー協会
山口コロニーワークセンター
太田 典文

山口コロニーワークセンター(生活介護・生活訓練・施設入所)では、現在提供しているプログラムに新たに生活介護午後のレクリエーションの時間に、勉強会を今年7月より行い利用者さんが学ばれています。名称については職員より募集し多くの中からコロスタに決まりました。

コロスタの目的として、楽しくプ



ログラムに参加していただき、コミュニケーションを円滑にコロニーでの生活を楽しく過ごすために始めました。



内容として、お金の取り扱いについては盗難、拾得時の対応について、普段何気なくすることも、人の物を許可なく使うこと、物の返却期限を守らなかったことによる行動、言葉遣いについて、パーソナルスペースについて正しい距離感の保ち方など、考えられるトラブルについて職員が寸劇を交えて、その都度みんなので考え意見を言いつて、理解していただけるように楽しくお伝えしています。利用者さんからの評価としては、職員の演技力に差があるものの、通常プログラムと違い



楽しく見ることができ満足されているようです。

効果としてプログラムに参加することにより、コミュニケーションや人と

接する際の利用者さんのトラブルが未然に防げることで、万が一にトラブルが起こった場合、早期解決に向かい良い方向に導いていくことができ、ワークセンターが過ごしやすい場所になると思います。

今後の内容として、虐待とは何かについて理解してもらい、何かあれば伝えられるようになり、SSTについては長期的に取り組んでいき、日常生活を営む上での生活スキルを身につけ、対人関係を良好に維持することができるようになればと考えています。

今までの実施内容についても繰り返し学び、もっと内容を充実させたコロスタをお伝えし、利用者さんがコロニー生活を安心して過ごせるようにしていきたいと思っています。

福岡

地域と共に

福岡コロニー コロニー課
コロニー係長
前野 保志

福岡コロニーでは、社会福祉協議会からの依頼を受け、新宮町の小学校(3、4年生)に対して、車椅子体験、施設見学、パラスポーツ体験などの福祉体験学習を行っています。今年から小学校だけでなく中学校にもその活動を広げました。

新宮町

は小学校・中学校が増設されるほど人口の増加が著しく、その子どもたちに対して、障がいのある方に対しての偏見を持たずにこれから育ってもらうためには、共に過ごし、会話をし、ありのままを感じてもらうことが大切だと考えています。

福祉体験学習の内容を一部紹介します。



・車椅子体験：車椅子の自走の仕方、介助の仕方を学びます。電動車いすを運転する時、最初は恐る恐るですが、慣れてくると最速で走る子どもがたくさんいます。

・施設見学：大きな印刷機が動き、そこで普段目にする学校新聞などが出来る様子に、目をキラキラ輝かせて見学しています。障がいのある方が働く場所を見学し、その感想を家族と一緒に話をするように伝えていきます。

・パラスポーツ体験：ボッチャ、フライングディスクなどを行います。障がいのある方と一緒にする時には、施設の利用者が教える側になり、アドバイスをしています。

先日、「あ、コロニーの人だ。この前、学校に来てもらったよ。ありがとう」と、ランドセルを背負ったグループに声をかけられました。また、別の日には、小学校



高学年の子が、利用者の車椅子を押して施設に連れて来てくれました。話を聞くと「具合が悪そうだったので声をかけて、コロニーと一緒に来ました」と答えてくれました。社会人になった方が見学に来た際、「私、〇〇小学校の時に、コロニーを見学したことがあるんです」と言われる事も増えてきました。

子どもたちが大人になった時に「あの時、こんなふうに感じた」という思いをいつまでも持ち続けてもらえたらと思います。

佐賀

元気の秘訣は魔法の言葉「パ・タ・カ・ラ」

佐賀春光園 希望の家
生活支援員 吉浦 純一朗

当施設は平成23年4月1日、佐賀県からの民間移譲により県立希望の家から社会福祉法人佐賀春光園希望の家として新たにスタートをしました。県立の時代を含めると、開所から現在まで40年以上の歴史がある施設です。現在は生活介護・施設入所支援・短期入所のサービスを提供しており、入所定員は50名で、10代から80代まで幅広い年代の方が利用されています。皆さんとてもお元気で、

明るく活気のある環境の中で生活されています。

利用者の方々は食事が大好きな方が多く、食事の時間を楽しみにしておられます。自力で食べることは、人間らしい生活を送るための基本です。そこで、元氣よく過ごしていたために私たちは毎食前に「お口の体操」を実施しています。人は加齢とともに手足だけでなく、嚥下機能の低下も進み誤嚥性肺炎等を引き起こしやすくなります。

そうならないよう、何か始めようかと数年前より取り組み始めています。



当初は早口言葉による発語の練習や、ラジオ体操で体を動かすというような取り組みを行っていました。最近ではテレビモニターを利用し映像を観ながらお口の体操を行っています。最初はリラクセスした状態を作るために深呼吸から始まり、肩の上げ下げや首をゆっくり回すなど、上半身

を動かして体をほぐします。それから、「ウー」や「イー」と声を出す体操や、舌を動かす体操、頬を膨らませたりすぼめたりする体操。最後に、「パ・タ・カ・ラ」「パンダのたからもの」と元氣良く発語をする体操。これを7分程度の時間をかけて行います。お口の体操の時間には職員も一緒にいます。日によっては体操の後に童謡などを歌うこともありま。誕生日の方がいらつしやる日には誕生日の歌を歌い「おめでとう」とお祝いをしています。

利用者の方々は、流暢な発語で普段からよくお話をされる方もいれば、言語障害があるために挨拶や会話がうまくできない方もいます。しかし、言葉を発することが困難な方でも、お口の体操の時間に「パ・パ・パ」と一生懸命声を出そうとされています。利用者の中には、「自分のために頑張っています」と率先して体操に参加される方もいます。少しずつ声が出てきている様子も見ることができ、体操の効果を実感するとともに、必要性を再認識しています。魔法の言葉「パ・タ・カ・ラ」を含めたお口の体操を通し、これからも利用者・職員共々元氣で明るく希望のある施設にしていきたいと思っています。

熊 本

放課後等デイ「あした」 をワンチームで

熊本県コロナー協会
児童指導員 坂本 浩一

中・高校生を対象とした「就労支援の準備段階という設定」の放課後等デイサービスを2年前に開設しました。半年かけて準備を行い、その間すでにそのコンセプトで事業を行っていた山形県コロナー協会と東京コロナー・トーコロ青葉ワークセンターの放課後デイも訪問し、色々と教えていただき、開設することができました。

意気揚々と開設したのですが、苦心したのは利用者獲得です。関係団体等に話を持ちかけても「それはいい構想ですね」と良い評価をいただ

くのですが、なかなか利用者が集まりません。その間に支出はどんどん増えていき、赤字状態が続きます。そこで考え方を一部変更し、当初「利用者は高校生



いましたが「中学1年から高校3年まで」に切り替え、通所方法も立地条件の悪さから「基本公共交通機関の利用で自力通所を」から「自動車での送迎います」に切り替えました。

このような対策をしたこともあり、利用者も少しずつですが増えていきました。そして今年4月、中学1年の利用者が4人入り、他にも利用者が増え、放課後等デイがとてにぎやかになりました。今年の夏にはみんなでNHK熊本放送局などの見学も行いました。

放課後等デイ「あした」の魅力的なところは、和気あいあいとしていて雰囲気がとてもいいところです。高校卒業と同時に放課後等デイもOBになるのですが、卒業してA型に通うOBが時々先輩として来てくれます。学校迎

えの送迎時に「今日は誰たちが来ますか？」と生徒がよく聞いてきます。中・高校生に年齢を絞っているのが近く、過ごしやすいのだと思います。実際相談を受ける生徒の保護者から、「今の放課後等デイは小学生が多

く会話が合わないのです」とよく言われます。最初は利用者が少なく赤字運営だったのですが、最近利用者も増え、月によっては黒字の月も出てきました。でもまだまだ安泰ではありません。来年3月には合計6名が高校を卒業します。3月までにその人数分の補充をせねばなりません。これからは児童発達管理者の森さんを核に、4人ワンチームで「あした」をチームワークで盛り立てて行きたいと思います。

沖 縄

みかん狩りしながら自然 との触れ合いを

コロナー児童デイサービスくわえ
指導員 新垣 善忠

私たちコロナー児童

デイサービスくわえは、1年の取り組みとして様々な企画を提案しています。季節に合わせたイベントの参加や地域での祭典など、児童達にできるだけ多くの体験を通じて触れ合い、社会へと旅立つ為の成長の糧となる



様スタッフ一同日々努力しています。

そんな中から、毎年恒例行事として行っている「みかん狩り」を紹介させていただきます。11月3日の文化の日に秋のイベントとして、沖縄県国頭郡本部町伊豆味にあります「シロマみかん園」を利用しております。そちらでは、様々な品種のみかんを取り扱っています。有名なところでは、例えばシークワサー(完熟12月頃)、他にもカーブチー(10月頃)、オートー(10月頃)、タルガヨー(10月頃)、いずみ紅(12月頃)、クガニー(12月頃)、タンカン(1月〜3月頃)があり、私たちが毎年収穫しているみかんは「カーブチー」になります。

カーブチーを収穫できる場所が、トイレ等の施設を過ぎたすぐのところに位置しており、斜面を下るので

すが緩やかになっており、車椅子の方も入れるようになっていきます。トイレもバリアフリーがあり、車椅子の児童もいる為、環境的にはとても助かっています。

また駐車場も大型バスが停められるほど広く、毎年4台の車で行くのですが、駐車に困ることがないほど快適な空間です。

時期的な事もあり、台風の影響によつては実があまり実ることがなく、みかん狩りイベントができない年がありますが、自然との触れ合い等の重要性から恒例行事としています。

シロミかん園では、みかん狩りをするだけではなく、他にも体験できることがあります。自然の中ということもあり、園芸コーナーとしてお花などの植物を触ってみたり香りを楽しむこともできます。犬との触れ合いもでき、虫捕りを楽しむ児童もいます。



場所も設けており、山道を少し上って行くので、車椅子の方や足の不自由な方には難しいと思いますが、児童達にはお宝探しのような気分です。楽しんでお宝探しのような気分です。楽しんでお宝探しのような気分です。楽しんでお宝探しのような気分です。

味覚・視覚・嗅覚・聴覚・触覚を用いて楽しめる施設であると思います。イベントとして利用するのも良し、プライベートで利用することもおすすめ致します。



第82回ゼンコロ総会、開催

11月14日、2019年度上半期事業報告書案、中間決算案を中心議題とした、第82回総会を中野サンプラザで開催しました。事業報告では、障害福祉サービス等報酬改定の影響と、障害者の労働施策と福祉施策の統合を目指した内容に触れ、その他の議題として、運営委員会の3部会（制度政策部会、事業部会、教育研修部会）の役割の見直し、会費規程の見直し、特別運営委員の選任などに関する提案を三役会議から受け、すべて承認されました。最後に各会員法人からの現況報告を受けて意見交換をいたしました。

また、障害者問題を課題とする2020年開催の国際会議について、ワーカビリティ・インターナショナルはオーストラリアのブリスベンで開かれ、ワーカビリティ・アジアはバン格拉デシュで11月に開催を予定しています。さらに、障害者権利条約の平行レポート作成に日本障



なかまの声

私の日常と今後の課題



青森県コロニー協会
セルブステーション青森
就労継続支援A型
藤林 明

ゼンコロの皆様、はじめまして。青森県コロニー協会・セルブステーション青森で工程管理補助をしている藤林と申します。通院している精神科の先生の紹介もあって、実習体験から利用開始したのが平成26年2月なので、早いもので6年たちました。

就労移行支援で一般就労を目指しながらCTP係で、検査用の出力紙や刷版の運搬などを務めていました。そこでの3年間は面付ソフトを扱うことはできませんでしたが、台割の組み方やPS版の意味合いなど、前職が印刷とは無関係なところから入った私にとって、利用開始後に導入されたプリントサピエンスの流れも含めて、今の部署に異動するにあたってのノウハウを学ぶことができました。平成29年4月から現在の工程管理補助を担当し、2か月後の6月1日付けでA型雇用となりました。現在の日常業務として、入稿された伝票の作業スケジュールを入力すること、1日3回伝票をコピーして工場内に配布しています。

作業で一番意識していることは、就労移行支援を利用中に職場実習をした際に指導員の方から言われた「目を離すと何をするか怖い」、私の障害（発達障害）特性の悪い面が現れ、独断で処理してしまうことがある危険性を指摘してもらったことを自覚し、上司への「報告・連絡・相談」を徹底することを心がけています。

今、気になっていることは、私たち障害福祉サービス事業所を利用する人は、住民税が非課税であるうちはいいのですが、所得額が一定額を超え住民税を納めることになるサービス利用料の自己負担が発生します。障害年金の場合非課税所得ですが、65歳になると老齢年金になり課税所得となります。賃金と合わせれば気を付けないと住民税がかかります。私自身、サービス利用開始から2年間自己負担がありましたので、注視しています。

就労を継続しつつ自己負担が生じるのを回避するにはサービスの変更や利用時間の短縮など、【働きたい】気持ちやそれまでの経験値を無視して利用料が発生しない働き方を考えるか、一日も早くA型から一般就労に切り替えて賃金の向上を目指す必要があります。障害を持つものが意欲的に働いて将来に不安を感じない環境づくりを期待しながら、今、私は与えられている業務に日々取り組んでおります。

なかまの声

最近思ふこと



佐賀春光園
中島 宗徳

私は36年前の昭和58年4月から佐賀春光園にお世話になっていました。私が入所した当時の春光園は一事業所を運営する法人で、事業として印刷と養豚を営んでいました。母体となる印刷はオフセット印刷でタイプライターを中心とした一字一字活字を拾って版を作っていました。それが昭和から平成へ、更には平成から令和へと時代が移ると共に春光園の印刷部もタイプライターから電算写植。電算写植からJ2000。J2000からCS4と時代の流れとともにアナログからデジタル印刷へと常に進化してまいりました。今振り返りますと36年という月日の重さを改めて感じさせられます。

私は現在57歳。個人的にも36年という長い月日は身体の衰えを感じます。春光園に入所した頃の私は、不自由なりに素早く動いて、友人と博多や大分方面に出掛けていました。それが36年たった現在は、身体全身の緊張が強まり、その強まった緊張は歩行にも影響が始め、町内のスーパまで友人の車椅子を押して歩

いて買い物に行くのがやつの状態です。また、友人も3年前に転倒して、それが原因で車いすの生活を余儀なく強いられています。このままでは3年前にやっとの思いで入居してきたグループホームでの満喫した生活が出来なくなると思い、友人と昨年12月からリハビリを始めました。リハビリは、週に2日福岡県小郡市にあります訪問看護ステーションから訪問して頂いて、作業の合間にリハビリのスタッフの方に緊張を取り除くマッサージや足首に負担を掛けない歩き方の指導を受けています。リハビリは長い目で見なければ効果は見えないものと頭ではわかってはいますが、リハビリ開始から半年が過ぎた現在、効果が出ているのか出ていないのか実感できません。また逆に「このまま歩けなくなるのでは。」と不安に陥る事もしばしばですが、私達は諦めていません。もう年だから仕方ないという言葉では済ませたくありません。でも、老いは誰にだって訪れます。自分のことを振り返り嘆くより、これからの楽しみを見つけ、どう生きるかを模索するのが大事だと私は思います。私の今の楽しみは、博多に飲みに行く事と春光園の周囲の畦道を友人の車椅子を押して動き回り、季節の草花を楽しみ季節の風を感じる事です。今後はそんなゆったりした時間を大切にしたいです。そしてまた、私ができる作業は限られています、仕事ができるこの環境も大切にしたいと思うこの頃です。

社会福祉法人は今、 社会から何を求められているか？

佐賀春光園 常務理事 大石 安弘



我が国における障害者福祉施策は、戦後の生活保護法に位置付けられた救護施設に始まり、身体障害者福祉法、知的障害者福祉法、精神保健福祉法が成立。高度経済成長と共に福祉予算も年々増大し、施設の増加と充実が図られてきた。

平成に入ると5年の障害者基本法公布、15年には支援費制度への移行、18年の障害者自立支援法の施行、24年には障害者総合支援法への改定、29年は社会福祉法人制度改革により、経営組織のガバナンスの強化、事業運営の透明性の向上等の改革、介護

人材の確保推進、施設職員等退職手当共済制度の見直しが行われた。

昭和の良き時代、授産施設や福祉工場では、皆で力を合わせて売り上げを伸ばす。伸ばせば工賃がアップする。工賃がアップしたら欲しいものを手にする。翌年は新たな目標を掲げ皆で実現に向けて努力する。私が障害者福祉、とりわけ授産事業にお世話になった当時は、法人運営上もこれで良かったと思っていた。

しかし、平成に入りバブルが崩壊したことで社会の歯車が狂い始め、度重なる法の改正や制度改革で社会福祉法人に求められる責任は、より質が高くきめ細かで、より多く、より重くなっているように思う。

近年、福祉現場において介護職を中心とした職員不足が続いている。高齢者施設では要介護3以上でない施設入所ができないとか、施設を利用しようと思っても、職員不足に

より施設側では利用ニーズに応えられない。入所受け入れができない。障害者施設も同様に、職員を募集しても中々応募者が居なくて人員確保が難しい状況が続いている。また、保育所にあっても保育士不足により待機児童が発生し大きな社会問題となっている。

近年少子化の影響なのか、それとも福祉職への関心が低下しているのか、福祉系を学ぼうとする学生は年々減少しているようで、福祉現場での新卒者確保は大変難しくなっている。

福祉の世界ではこれまで、社会的弱者に対して福祉従事者の善意や奉仕のこころ、自己犠牲的な精神に依存することが多かったように思えるが、これからは福祉職に就く若者が経済的にも精神的にも豊かな生活が保障される労働環境の整備が求められる。

一方でこれからの社会福祉法人には、長年の業績や社会貢献に奢ることなく、多様な地域社会のニーズ、よりきめ細かな個人のニーズに合った独自性を発揮できる質の高いサービスを提供することで、利用者選ばれるための、新たな信頼を得るよ

う、役・職員の一丸となった努力が必要と思われる。

また、国内においては想定を超えた自然災害が毎年発生しているが、社会福祉法人の持つ社会資源を緊急時には地元自治体や地域住民への避難所等として開放し社会へ貢献することも大切な役割だと考える。



お薦めの本

『名短篇、ここにあり』

ちくま文庫

ながのコロニー
理事長
田中 幸廣

30代後半から40代は読書をしました。50代以降とんと読書しなくなりましたが、短いモノは読んでいます。

日曜日午前10時、作家の小川洋子さんが小説を紹介するラジオ番組があります。小川さんは、朝の番組なのに、女性なのに、男女の機微、愛の行動をさらっと言います。さすがに芥川賞選考委員会の重鎮。番組で久生十蘭の「雲の小径」が紹介されました。ちくま文庫「名短篇、ここにあり」に収められています。同文庫から名短篇シリーズが4冊出ており、早速買って読みました。今日紹介するのはシリーズの1冊「名短篇、ここにあり」。田本文子、井上靖、松本清張、吉池淳之介、城山三郎等々

の12編が収められています。この中の吉村昭「少女架刑」を紹介します。

主人公は呼吸が止まって間もない少女。主人公の遺体が横たわる貧しい家と集落の情景が描写され、病院から迎えるの車が来る。火葬代もないから献体するのだ。16歳の少女はシュミーズ1枚で、マニキュアした指を組んでいる。キャバレー回りのヌードチームの一員である少女は、発熱を押して働きに出て倒れた。肺炎になっても休めば罰金を取られる。

病院からの香典が母親に渡され、遺体は病院へ。着くやいなや臓器が切り取られる。少女の臓器が幾らかの金と引き換えられたのだ。

2か月後、標本の役割が終わる。お骨が母の元に届けられるが、母は少女のお骨を置く場所がないからと、病院に突っ返した。少女は無縁仏の納骨堂に入れられた。

短い中にエロティシズム、貧困、哀切が満ちています。



自慢の作品 シリーズ

花園神社 西の市

写真・文：東京コロニー 中野区仲町就労支援事業所 支援課 大西浩子

当事業所では月に2回プログラム活動を行っています。活動内容はスィーツ作り等の調理、お花見やバーベキュー等の外出、当施設内にある体育館で行うスポーツ等様々です。

も満たし、事業所用に購入した飾り熊手を手に持って花園神社を後にしました。「福が入ってきますように」という願いを込めて、熊手は事業所の入り口付近に飾ってあります。来年も皆さんと一緒に参拝できたら嬉しいのです。

この写真は11月の外出プログラムで、東京・新宿にある花園神社西の市に行った時に写したものです。露店に多数並ぶ「飾り熊手」は一つ一つ手作りで可愛らしい物から両手で抱える程の立派な大きさの物までとにかくたくさんありました。落ち葉をかき集める熊手は運をかき込み、福を招くとされる縁起物として人気。ライトに照らされる飾り熊手の美しさに思わずシャッターを押した一枚です。

11月の西の日に行われる西の市は明治時代から続く伝統行事で花園神社には毎年60万人もの参拝者が訪れると言われていています。この日は平日にもかかわらず多くの人で賑わっていました。商売繁盛、家内安全の飾り熊手を商う露天商の賑やかな声は師走を迎える街に欠かせない風物詩となっているそうです。お祭りといったら屋台ですが、境内はもちろん、靖国通り沿いにも並ぶ飲食屋台、どのお店も美味しそうで見移りしてしまいました。屋台でお腹



トピックス

○第5回スキルアップ研修会を開催

9月5日から6日にかけて、中野サンプラザで第5回スキルアップ研修会を開催しました。内容は中村会長による講演「環境の変化をどう捉えるか」、「働く」について考える「井上運営委員の「直近の厚生労働省の動き」、尾林講師による「コーチング」職員のかやる気育て」、山口県コーニ協会が実施している「メンター制度を学ぶ」(ロールプレイ)、そしてワーカビリティ・インターナショナル(WI)による米国・アナハイム会議の報告、ワーカビリティ・アジア(WA s i a)のマカオ会議報告と、盛りだくさんとなりました。受講者からは、「議論されている内容など、情報に敏感になっていくことが重要」、「報酬改



第5回スキルアップ研修会

定の内容や視点について知ることが多くあった。法人が運営している事業が、今、どのような状況な

のか？積極的に私自身はどう関わったのか？考えて生きたいと思う」、「コーチングについて、皆を巻き込んで話をしてるので、常に意識しなければいけないところが良かった」、「メンター制度は新人だけでなく、普段でも役に立つのではないかと思った」、「現在、児童の発達障害者の支援に取り組んでいるが、『働く』とどのようにつながっていくか、考えさせられた。関わっている子どもたちの未来、今、生活している当事者の方に、私たちは何ができるか。自分の職場で考えていきたい」、「海外の動きについて知ることができ、良かった」などが寄せられました。

○第2回ジョブ・マッチング担当者会議を開催

印刷事業における重度障害者のジョブ・マッチング担当者の2回目の会議を11月26日から27日にかけて、中野サンプラザと東京コーニー・大田福祉工場で開催しました。事前に出席者に提出してもらった、精神・発達障害者を中心とする新規好事例やフォロアップの実情についてお互いに情報交換をし、2日目は、印刷事業を主に運営している東京都大田福祉工場の見学を兼ねて、五つの



第2回ジョブ・マッチング担当者会議

る「メール会議」を開催し、引き続き検討を進めました。

○第5回発達障害者支援研修会、開催

12月5日から6日にかけて、発達障害者の就労支援に取り組む特例子会社の視察と、「多摩草むらの会」の風間理事長の講演、2日目は自身が発達障害である講師の講演を伺いました。特例子会社では、障害に合った作業しやすい環境づくりを徹底しており、大変参考になりました。草むらの会は親の会から1997年に立ち上げ、精神の障害者が「これをやりたい、あれをしたい」という気持ちの実現を、事業展開の前提としています。そのため、布製品の製作・販売、レストランの経営、ギャラリースタッフ、パソコン教室、グループホーム、さらには8千坪の空き地を取得して、農地所有の確法人・株式会社グリー

事例を紹介していたいただきました。その後、検討すべき課題の意見交換を続けるため、参加担当者によ

ン・ガーラまで立ち上げ、エネルギーシユな活動展開に圧倒されるばかりでした。発達障害の講演のテーマは「支援者に知ってもらいたい自閉症スペクトラムの世界」。内容は、自己紹介からはじまり、「私の自閉症世界から」、「自閉症をコペルニクスする」、「支援できると大切なこと」で計96コマの資料を用意して臨んでいただいた。当事者でないと、とても気がつかないと思われる事例を具体的に紹介してもらい、「はっ」と気づかされる場面が多々ありました。



第5回発達障害者支援研修会

面が多々ありました。AD S者は社会性やコミュニケーションに障害があるわけではなく、多数派の人々が共有しているデザインとは異なる社会性やコミュニケーションを持つ可能性が示唆されている(東大の熊谷先生)、つまりは「ひとつの生き方」なのだという言葉に、うろこが落ちる思いがしました。講演の後にも時間をとって受講者とさまざまな意見交換を行い、理解を深めさせていただきました。

綱 領

現代社会には、様々な障害のある私たちの仲間が生活している。

私たちは戦後の混乱のなかから、自らが生き、働く場をつくる事業と運動を共同してすすめてきたが、障害を理由に生きる諸権利が制限され、その状況は今日もなお続いている。

私たちが願う進歩した社会とは、すべての人々の自由と尊厳が守られ、平和で人間らしい生活を送ることができる社会であり、このことは人類共通の願いである。

私たちはそうした人間尊重の理念にたち、完全参加と平等と障害者の働く権利の具体的な保障をめざし、わが国の関係制度や社会・経済・文化的諸条件の改善を図り、すべての人々が幸せに生きることができる社会の実現に向けて連帯し、積極的に行動する。

私たちの誓い

開拓者の心	私たちは、試されたことのない道を自分たちの手できりひらく開拓者のところをもち続けます。
働く喜び	私たちは、さまざまな困難を乗り越え、働く場やそれを支える暮らす場を創設し、働くことをつうじて積極的に社会に参加できることをめざします。
可能性の追求	私たちは、ひとりひとりの多様な可能性を信じて、新しい能力を発揮する努力を続けます。
連帯と協力	私たちは、お互いに協力し、励まし合い、かわることのない連帯で幸せを築くことに努めます。
豊かな社会	私たちは、心を合わせて、すべての人が障害の有無に関わらず、人としての幸せを感じられる、平和で豊かな社会の実現をめざします。

2014 (平成 26) 年 11 月 21 日
一般社団法人ゼンコロ 第 67 回総会 改訂承認

編集後記

◆ 昨年、台風19号の来襲で10月に熊本県コロニー協会で開催を予定していた第5回交流型技能競技会がやむを得ず中止となりました。準備に奔走していただいた熊本の皆さまには大変残念な想いを残し、また、競技を楽しみにしていた多くの参加予定の皆さまにもご迷惑をおかけしまして、申し訳ありませんでした。今年はそのリベンジを是非とも図りたく、改めて熊本県コロニー協会で開催したいと願っています。競技会はDTP競技部門、喫茶サービス競技部門、ビル・クリーニング競技部門と、障害のある方々が日ごろの腕を発揮していただく良い機会でもあり、また、ゼンコロ会員法人が大勢集う唯一の機会でもあります。

今年こそ好天に恵まれますよう、願うばかりです。

◆ 戦後、結核回復者が全国各地の結核療養所から出て、「めざす方向はコロニーであり、生産集落である」を合い言葉に、互いに生き残るべく、結集して1961(昭和35)年10月に「全国コロニー協会」を立ち上げました。その後、名称を「ゼンコロ」と変え、今日に至っています。結核の病を持ちながら働き、生活の場を開拓する先人たちの苦難の連続ではなかったかと、偲ぶばかりです。私事で恐縮ですが、私も赤ん坊の時に小児結核にかかりました。当時の結核の特効薬として輸入され始めた「ストレプトマイシン」を親が苦勞して手に入れ、幸いにして難を逃れることができました。現在のゼンコロは身体、知的、精神、発達障害など、多くの病をもつ、子どもから大人までの障害者の生活と労働の支援に関わる10の社会福祉法人で構成されています。ゼンコロ事務局として、当初の結核回復者の先人が開拓した事業に関わることができたのも、何かの縁を感じています。

(渡辺)

紙文書の電子化は働き方改革の第一歩

STELLAR GROUP

本 社 〒112-0004 東京都文京区後楽 2-3-21
住友不動産飯田橋ビル 11 階 TEL:03-5804-8780
立 川 〒190-0023 東京都立川市柴崎町2-3-6
第一生命ビル3階 TEL:042-525-2146
三 鷹 〒180-0006 東京都武蔵野市中町1-9-5
第一中央ビル3階 TEL:0422-52-8351
神奈川 〒231-0015 神奈川県横浜市中区尾上町6-86-1
関内マークビル2階 TEL:045-651-7421



FUJIFILM Value from Innovation

成長は、「省資源」から。



もっと強く、もっと付加価値の高い印刷ビジネスを実現するために
富士フイルムは提案します——成長は、「省資源」から。
材料・工数・水・エネルギー・排出、これまでの「コスト」を減らし利益に還元。
製版・印刷工程を軸にした、独自のソリューション「FUJIFILM SUPERIA」が
あなたの会社をどこよりも強いものへ変えていきます。

**FFGSは、戦略的『省資源』で、
トータルコストダウンを支援いたします。**

「減らす」がつくる、クオリティ **FUJIFILM SUPERIA**

富士フイルム グローバル グラフィックシステムズ株式会社 ホームページ <http://ffgs.fujifilm.co.jp>
本社 〒106-0031 東京都港区西麻布二丁目26番地30号 富士フイルム西麻布ビル 03(6419)0300



— 確かな経験と豊富な実績 —

昭和44年の創業以来、北海道から沖縄まで全国各地に600件の公立・民間
の福祉・医療施設建設を手がけた、数多くの経験と実績があります。施設の移
転計画、増改築計画等、どんなことでもお気軽にご相談ください。計画・申請か
ら設計／監理にいたるまで一貫したお手伝いをさせていただきます。

株式会社 新環境設計
代表取締役 荻原正之

〒113-0033 東京都文京区本郷4-9-15 ADMAXビル
TEL. 03-5800-0321 FAX. 03-5800-0505
<http://www.shinkankyo.co.jp>

DO Making Safety Sysem for environment
循環型社会・福祉社会への貢献



Recycle material market business
Total waste manegement planning

(株)ドムス環境総研 代表取締役 星川寛行
〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 1-6-8